

イタリア王国の美術外交と日本

—画家松岡壽を中心に—

河上 眞理 (京都芸術大学)

侯爵鍋島家と旧佐賀藩士百武兼行

富田 紘次 (公益財団法人鍋島報効会 徴古館)

駐イタリア日本特命全権公使 鍋島直大と
日伊関係史におけるその役割

—日伊両国の一次史料を中心に—

ポッツィ・カルロ・エドアルド (大阪大学)

歴史画家としての百武兼行

—イタリアでの覚醒と挑戦—

吉住 磨子 (佐賀大学)

日時 | 2023年3月4日(土)

(開場 12:30) 13:00 – 16:30

場所 | 佐賀大学
本庄キャンパス
教養教育2号館1階
2101教室近代日本と
近代イタリアの
共鳴佐賀の近代史と日伊関係史から
照射する日本近代美術史の新側面

無料

事前予約
不要COLLOQUIUM
公開研究会 (コロキウム)

日本からイタリアへ / 佐賀からイタリアへ

明治政府の近代化政策において、日本は欧米各国に範を求めたが、美術の分野において日本がモデルとしたのはイタリアであった。そして、新設の工部大学校の下部組織として 1876 年 (明治 9 年) に工部美術学校が開校し、イタリアから芸術家 (美術教師) たちが招かれ、本格的な西洋美術の移入が始まった。一方、同じ頃、日本からイタリアに渡り、絵画を学んだ日本人もいた。その一人が、佐賀出身の百武兼行 (1842 ~ 84) であり、百武とともにイタリアに渡ったのが、工部美術学校でも学んだ松岡壽 (1862 ~ 1944) であった。二人の渡伊のきっかけは、旧佐賀藩主鍋島直大 (1846 ~ 1921) が駐イタリア日本特命全権公使としてローマに赴任が決まったことにあった。

本コロキウムでは、19 世紀後半の日伊のそれぞれの政治状況や日伊関係史に焦点を当て、明治時代初期の日本近代美術史を捉え直すことを目的とする。また、政治家としてのみならず、芸術保護者としての鍋島直大にも光を当てることにより、同時代の美術史の新側面を浮かび上がらせることも試みたい。

研究者はもとより、一般市民や学生にも広く開かれた研究会です。対話や議論を重視し、参加者すべてが話者となれることを願い、「一緒に話す」という意味をもつ「コロキウム」という名前にしました。多くの方々のご参加をお待ちしております。なお、本コロキウムは科学研究費の助成を得て実施するものです。

< 問い合わせ先 >
yoshizum@cc.saga-u.ac.jp (吉住)